

「底が突き抜けた」時代の歩き方 488

いま、「声にならない声」はどこまで届くのだろう

幼稚園で
真っ白い画用紙
渡されたから
親指を噛み切って
赤く染めてみた
大騒ぎする大人たち
のまんなかで
考える
わたしを基準とするならば
皆壊れてしまっているのだ
（空白を埋めるためには
血液しかないだろう）
高校で
中学でのいじめという悪臭を
うまく隠していた
はずなのに
腐りきった細胞
はどこまでも腐りきっていて
匂っていたようだ
それでも彼等にカッターを向け
（シネ）
と云った時
の快感を忘れない
わたしを基準とするならば
皆きれいなくつをはいている
（どこまでも血が必要なのだ）
性行為は
汚い
とおもっていた

今では恋人が
私の胸に顔をうずめて眠っている
今日も洗濯物を取り入れるのを忘れた
けれども
きすをすることだけは忘れない
(ひきあう血は絶対なのだ)
恋人は
駅のホームの内側を歩けない
少しずつ
線路内に吸い寄せられる
私は
たった一カケラのチョコレイトを
食べただけで死にたくなる
どうしようもないから荷物を
一緒に背負って
なるべく人ゴミを避けて歩く
私達を基準とするならば
皆かわいそうに不幸なのだ
血が必要だ
溺れてしまう程の
たくさんの血が必要なのだ
眠ったままの恋人の
顔を見ながら
詩を書いている
私達はきっと幸福なのだろう
(「私達はきっと幸福なのだろう」 - 三角みづ紀『オウバアキル』所収)

《昨年秋、大阪に来たとき、「自分にあった仕事が見つかるかもしれない」という大きな垂れ幕を見た。その時、「何が自分にあった仕事だ」と、一人で怒っていた。垂れ幕は「もうすでに自分がある」ということが大前提。その自分というのは、すでに決まっ
ていて、どんな仕事をするのか、選ぶことのできる自分である。

物質的には、一年たてば、体の95%は入れ替わっている。だが、現在の人には「私は
しっかりした物体だ」と思っている。だから「自分にあった仕事がある」と考える。

たいていの人には「人が変わる」ということを信じない。それは流行語でもわかる。「ナ
ンバーワン」より「オンリーワン」。個性を持っていることが貴重と言っている。そし

て、「個性をのばせ」と言う。だが、個性は遺伝子で決まる。個性を伸ばすことはできない。》

05.2.23 付産経でこう言っているのは、養老孟司である。人間の死体ばかりを相手にしてきた解剖学者だから、なかなか頑固なところがある。「人が変わる」という彼の主張は、これまで何度も目にしてきた。「自分にあった仕事」なんかどこにもない、ということも繰り返し耳にしてきた。「人が変わる」といいながら彼の主張は変わることがなかった。「人が変わる」のであれば、人の考えも変わるのではないか。人の考えが変わらずに、「人が変わる」とは、どういうことであるのか。もちろん、養老孟司は一貫しているとみることもできよう。出来上がっている自分などどこにも存在しないのに、一体全体、どこに「自分にあった仕事がある」というのか、個性はゴム紐のように伸ばせられないのは「本当のこと」だから、「本当のこと」は据じ曲げることはできない。その意味では彼は確かに一貫しているといえよう。問題は、彼の口調がなぜ変わらないのか、どうして見方が深まらないのか、というところにあるだろう。

同じことを同じ言い方で、彼は繰り返してきた。これもまた、一種の停滞ではないのか。もし彼がずっと考えつづけてきているのであれば、その考えに合わせて言い方が変化するのとは当然だし、同じことをいってもある「新しさ」がそこに加わってこなければ、いくら「本当のこと」であっても、人はその「本当のこと」に聞き飽きてしまう。大ベストセラーの『バカの壁』にしても、彼自身が認めるように、それまで繰り返してきた彼の主張が若い編集者の文体に翻訳されただけのことであって、そこには言っていることの目新しさはない。彼の本を読んだことのない人が新鮮さを感じたから、爆発的に売れたということである。だから、彼自身が驚いた。しかし、『バカの壁』が彼自身になにかを刻んだということはない。ちょうど、「自分にあった仕事」などどこにもないと繰り返すことが、もはや彼自身になにも刻まなくなってしまうように。

考えなくてはならない問題は、養老孟司が「本当のこと」を繰り返すところにあるのではなく、その「本当のこと」を繰り返すことがもはや彼自身に対してなにも付け加えなくなってしまうところに、そしてそのことに彼が気づいていないところにあるといえよう。別のいいかたを試みる。「^{しんげん}変わらないためには、変わらなければならない」という、逆説めいたいいかたがある。この箴言がいおうとしていることは、自分は「変わらない」と思っているなかで、人は刻々と変わっているが、本当に自分が「変わらない」ようにするためには、どれほど意思的に変わっていかなくてはならないか、ということだ。養老孟司がいうまでもなく、人は変わっていく。自分でもわからぬぐらいに変わっていく。その道理に反して自分が「変わらない」ようにするためには、どれほど意思的に自分を変えようとするあらゆる勢力と命懸けでたたかわなくてはならないか。つまり、「変わらない」自分を不断につくりだしていくたたかいが不可欠であり、そのたたかいを引き受ける自分へと「変わらなければならない」のである。

養老孟司は「人が変わる」ことは知っていても、人が「変わらないためには、変わら

なければならない」ということを知っているのだろうか。もし知っていたなら、聞き飽きるぐらい、同じことを同じいいかたで繰り返したりはしないだろう。そこにたたかいはみられない。同じこともまた、成長しなくてはならない。いいかたの深みに含まれる「新しさ」がなければならない。《「何が自分にあった仕事だ」と、一人で怒っていい》る彼が気づかなくてはならないのは、《「自分にあった仕事がある」と考える》ことで、「自分にあった仕事」などこの社会のどこにもないかもしれないという絶望をかりうじて抑え込んでいる、若者たちの「どこにも行けなくなっている」悲惨な状況である。錯誤だ、といくら怒ったところで、錯誤に陥ること以外の選択肢はないと思っている若者に聞き入れられる筈がない。なにに対しても怒ることすらできなくなっている若者に較べて、怒っている養老孟司のほうが脳天気になんてみえてしまう。

「人は変わる」ということは本当だが、「人の考えは変わらない」ということも本当である。だからこそ、「変わらないためには、変わらなければならない」という逆説が、ここで生きてくる。「人は変わる」ということに対して、「変わらない」と挑戦しているのだ。「人は変わる」ということは、世の中の趨勢に人は押し流されていくということである。「変わらない」ということはしたがって、世の流れに抵抗することだ。抵抗するためには不断に「変わらなければならない」。自分が変わらずして抵抗というものはありえない。「人は変わる」けれども、人はまた「変わらない」ように努めようとする存在でもある、という視座を含まなければ、「人は変わる」といったところでなんの意味もない。

若者はなによりもまず、「変わらない自分」に対して深く絶望している。「変わらない自分」はダメだと思っているから、「ダメな自分はダメなままである」という信念をますます募らせてしまう。自分は変わらないということを確固として信じているから、仕事にあった自分ではなく、「自分にあった仕事」を持つとするのである。それは「確固たる自信のなさ」のあらわれであり、確固たる絶望の深さの表明にほかならない。「自分にあった仕事」を待つ若者に傲慢さをどこかで感じているから、養老孟司は彼らに説教を垂れたり、叱ろうとするのだが、彼には「変わらない自分」に絶望している若者の苦悩が全くみえていないのだ。若者が「変わらない自分」に絶望する前に、自分自身をどこまで変えようとしてきたのか、という疑問は感じるけれども、その疑問より先に「変わらない自分」への絶望がやってきているように感じられる。

「変わらない自分」にどれほど若者たちが、「確固たる自信のなさ」を滲ませているか。そのことを端的に浮かび上がらせるレポートが、「日本に帰れない 外こもりな人々」(『アエラ』05.5.2-9)の表題で掲載されている。《日本の自分の部屋に引きこもるのではなく、日本を飛び出し、外国に滞在し続ける「外こもり」》の事例が、以下に報告されている。《タイのバンコクは、2月でも最低気温が20度を下らない。

1泊700円程度の宿で昼過ぎに起き出すと、サンダルをつっかけ、近く中華料理

屋へ。その後向かう先は、自分の宿にほど近い「日本人宿」。食堂には、いつも数人の日本人がたまっている。地ビールを飲みながら、旅情報や世間話などをだらだら喋る。名乗り合うことはほとんどない。ひたすらそんな毎日を過ごし、金がなくなると日本に帰る。

オサムさん（４２）は、そんな生活を繰り返している。

日本での住まいは京都。戦前に建てられたトイレ台所共用、家賃１万６千円のアパートに住み、デパートの荷物配達などの短期バイトで、月に４０万～５０万円を稼ぎ出す。３、４カ月働いて金が貯まったらタイへ行き、１、２カ月滞在。数年前まではタイで紀行文などのライターもしていたが、今はそれもほとんどしない。仕事をするのが損に思えてくるのだ。

京都の大学を出て、メーカーの営業職についたが、１年ほどで辞めた。職場で唯一、あたたかく接してくれた上司が「あいつは無能だから窓際に追いやられている」と陰口をたたかれるのを聞き、「このままだと会社に洗脳されてしまう」と辞表を出した。

「仕事はきつくなかったし、会社の合間にバンドも続けていた。でも、少し上の先輩は連日残業していて、いずれ自分もああなるのかと思うと……敵前逃亡ですかね」

それからは、図書館の嘱託職員をしながら長期休暇にバックパッカーとして各地を旅行していた。タイに「半定住」するようになったのは、ここ１０年だ。

「タイは物価が日本の１０分の１くらい。今では、日本に出稼ぎに行く感覚です。ここでは『生活』しなくていいから楽でいい」

タイへの「半定住」組とは異なる、次のような海外放浪生活の事例もある。

《数年前、４年間の海外放浪を経てカイロ、バンコクに半年間「沈没」していたタケシさん（４０）》は、「できるだけ日本を離れていたかった。だからずっと、定職につくのも嫌だった」と当時を振り返り、《２０年前、５年かけてもらった大学の卒業証書を実家の父親に見せながら》、「仕事にはつかん。オレは世界を見て回りたいんや」と切り出して、官僚だった厳格な父と夜中まで大げんかしたことなどを話す。

父親は、《長男だったタケシさんを、口答えをした、帰りが遅いと言っては殴った。家が嫌で、家から離れた大学を受験した。大学時代、２カ月かけて中国を旅した。

「自分で行き先を決め、情報を集めて、見たいところを見てまわる。それが僕にとって、味わったことのない『自由』だった」

親の望みどおり就職したら今度は会社に縛られ、自由がなくなる。就職活動は、数社でやめた。

「父親は『海外でのたれ死んでもしらん。勝手にせえ』と。それからほとんど口をきいてません」

警備員のバイトを半年ぐらい続け、海外を２年以上かけて放浪する生活が続いた。母親は毎月手紙で仕事についてくれと書き送ってきた。それが嫌で、また海外に出る。これまで行った国は１００カ国近く。イラク戦争の起こる前に、イラクにも入った。

バンコク滞在中、他の「沈没」組からこんな話を聞いた。

「世界中を旅してきて、一番行けない国は『日本』なんだと。外国では海外生活が長いというだけで尊敬され、サロンもできるけど、日本に帰ると落伍者扱い。仕事もしないといけない。もう帰れないというのです」

数年前に大学の同窓会に行った。だが、「課長になった」「子どもを受検させる」という話に一切ついていけず、黙ったままだった。》

「変わらない自分」に対する絶望は、「変われない自分」に対する絶望にほかならない。「変わらない自分」であってもよいのではないか。「変われない自分」であることが、どうしてよくないのか。しかし、「変わらない自分」-「変われない自分」に対する強い否定的なまなざしは、周囲から押し迫ってくる。したがって、「変わらない自分」-「変われない自分」に対する絶望は、自分がそう感じているよりも、「変わらない自分」のまま居続けることのできる居場所のなさに対する絶望といえる。もちろん、居場所をなくしているのは日本であり、日本の人々である。だから、日本から飛び出した人々にとって、「世界中を旅してきて、一番行けない国は『日本』」ということになるのだ。長い海外生活が外国で尊敬されるのはチャレンジ精神以外に、積年の苦勞の^{ひた}壁に自然と目が行くからであり、日本では反対に「よそ者」扱いしかしない。

《タイの日本人宿には、彼のように何をするでもなく長期にわたり滞在する「沈没者」たちが多い。旅行ガイド『地球の歩き方』を出すダイヤモンド・ビッグ社出版本部長の石谷一成さんは、こう語る。

「バックパッカーで『日本人宿』のようなものを作るのは日本人くらい。現地とのコミュニケーションを避けて楽なほうに流れている面もある」

宮崎公立大学でバックパッカーを研究する新井克弥助教授（メディア論）は5年前、タイの沈没者コミュニティを見にいった。バンコクには日本人が7割を占めるアパートも、日本食が溢れるコンビニもあった。生活には困らない。

また、ある女性は宿で、拾ってきた仔犬を一生懸命育てていた。毎日一回絵を描くことをノルマにしたり、タイ料理を100種類覚えようと必死な男性もいた。

「彼らにとっては、海外は一種の『サナトリウム』なんでしょうね。海外に出ると、毎日いろんな選択を迫られるから、私がなんなのか、私だけのものって何か、濃密に感じられる。明確な目標を持たない人のオルタナティブなんですね」

専門学校に通うアケミさん（22）は、タイやベトナム、バングラデシュに約10回、児童施設でのボランティアも兼ねての長期海外旅行を繰り返してきた。

日本にいるときは、休みなく予定を入れてしまう。週5日は放課後にテレホンアポインターのバイトをし、休日は障害児に水泳を教えるボランティアをする。生け花教室にも通い、時間ができるとファミレスで資格の勉強……。

「日本では一度しか着ない服を買ったり、楽しくなくてもしゃべったりしなくてはなら

ない。そんなのって疲れませんか？　なんかいつも気を張って、作られてる自分を演じている気がしている」

小学1年生のころ引っ越しし、弟が生まれた。慣れない環境の中、母親には「お姉さんだから自分でできるでしょ」と厳しく言われてきた。高校のころから、家にあまり寄りつかないようになった。

19歳の時、友人とタイに旅行した。家庭の事情を抱える子どもたちが学ぶ学校でボランティアを志願、泊まり込んで、連日子どもたちと泥だらけになって遊んだ。

「8歳の子に片言のタイ語で『それおいしい？』って聞いたら、『おいしい』って返ってきて」

初めて「素」の自分を出せた気がした。ベトナムでは、性的虐待を受けた子どもの施設で朝から晩まで雑用に追われる。それでも愚痴を言ったり甘えたり、日本にいたときよりずっと肩の力を抜ける。日本では絶対にやらない「昼寝」も、すっかり習慣になった。「自分を知らない人ばかりだから、いいのかもしれない。ボランティアに行き、自分も癒やされて帰ってくる、という感じ」

東京に住む男子大学生(20)は、店に行っても、店員に見つからないよう商品の陰に隠れるほど会話が苦手だった。友人に誘われ昨年1カ月間、タイの児童施設を回って子どもたちと遊ぶボランティアのツアーに参加した。得意だったテーブルマジックを披露し、子どもたちから喝采を浴びた。

「旅の最後には、街の屋台で片言の英語で『もっとまけてくれよ』とか、やり取りできるようになった。日本じゃ考えられない」

今はまた、海外に行くために金を貯めている最中だ。

NGO「ボランティアプラットフォーム」代表の福島慎之さんは断言する。

「ボランティアというのは、人のために何かやっているというだけじゃない。自分の渴望を満たすためにやるものだと思うのです」

このレポートに登場する人たちから連想されるのは、高遠菜穂子さんら日本人質事件の三人であり、イラクで殺害された香田証生さんである。だが「自分探し」の旅というよりも、「海外は一種の『サナトリウム』」という言葉通り、日本で鬱屈して海外で癒やされるというパターンが感じ取れる。読めば読むほど日本社会の息苦しさが浮き彫りにされるが、ニートにもひきこもりにもならず、フリーターとして日本社会ではもはや不可能になった「深呼吸」をするために、彼らが海外に飛び出すのは、「変わらない自分」の行き先からすれば不可避であろう。そんな生活がいつまで続くか、という声が聞こえてきても、それが可能な間はずっと続けられればいい。やれなくなったときはそのときであって、将来の不安に拘束された現在の生活など送らないほうがいい。日本にいればできなかったことが、海外でやれるようになるのであれば、本人の成熟にとってとてもいいことだろう。

レポートには「深呼吸」にとどまらず、海外で「蘇生」を試みようとする人々も取り上げられている。成熟社会の生きづらさをひしひしと身に感じているのは、若者ばかりではない。

《日本での仕事に疲れきって海外を目指す人もいる。

昨年、タイのチェンマイに夫婦で渡り、レストラン経営などの会社を設立した男性（３３）。日本にいたころは、ぜんそくの吸入器を仕事でも手放せなくなっていた。コンビニの店長をやっていたが、本店とのトラブルで、折衝を続ける日が数年続き、神経も体もぼろぼろになった。一方で、店の人件費を削るため、自らレジにも立っていた。

気づくと、持病のぜんそくやアトピー性皮膚炎が悪化。昨年、契約満了を機に店長をやめ、約６年前に来たことがあるチェンマイに移住を決意。妻も賛成した。

移住後は、吸入器や薬を使わなくなった。海外なりの苦労も多いが、日本で精神をすり減らす日々より、タイでの生活のほうがずっと健康的だと彼は語る。

「日本だと何を提案しても『それは難しい』、こっちだと『とりあえずやってみよう』。そういうポジティブなところが、自分にあってるんでしょうかね」

渡米歴１０年以上、ニューヨークでレストランを共同経営する女性（３５）は、日本に帰るたびに蕁麻疹じんましんが出る。

日本が嫌いなわけでもないし、直接の引き金があったわけでもない。短大生のころからニューヨークの空気に憧れ、就職して１年で金を貯めて渡米した。バイトをしながら英語の学校に通っていたが、１０年前に家業を継いで欲しい両親に説得されて帰国。２カ月もすると、全身に蕁麻疹ができた。

「ホテルのクロークの仕事は苦ではなかったんですが、同僚たちと話が合わない。当たり前のように１０万円以上のブランドのバックを買ったり、あの人の時計がええわ、と噂をしあったり。そんなの、どうでもええやんと」

お茶くみなどの決まりきった仕事、バレンタインには社員にチョコを配る。職場のしきたりにも違和感を覚えた。実家からは、「結婚しなさい」とプレッシャーをかけられる。

「蕁麻疹が治らなくて病院に行ったら、神経性のものだからニューヨークに帰れば治りますよ、と。両親に「１カ月だけ」って頼み込んで飛び出してきました」

自分を一番出せるのは、アメリカだと感じている。

「『寂しい』とか、『愛してる』とか、感情を素直に出せるのは、英語でしかないんです。日本にいたときは、身の回りのいろんなしらがみが邪魔をして言えない」

もちろん、海外に出れば問題が即解決、というわけではない。ニューヨークに１０年近く住む女性（３７）は、こう話す。

「英語もできないし、何がやりたいかもわからない、自分を客観視できないで海外に出てきている人が増えた。アメリカは日本みたいに優しい人間関係がないから疲れ果てて帰る人もいるし、完全に家から出てこなくなる人もいる」

最近も、日本人カメラマンがアパートで死後数日たって発見されたという。》

「日本で精神をすり減らす日々」が身体に悪影響を与えて、持病のぜんそくやアトピー性皮膚炎を悪化させたり、蕁麻疹を惹き起こしたりする事例が報告されている。こうなると、日本での生活をもはや身体が拒否しているのしか思われなくなる。もちろん、身体が拒否以前に精神が拒否しているのだが、日本の社会が生きづらくなっているのは明白として、これまでの事例には当然のことながら、自分を追い詰めてくる人間関係や社会、空気に抵抗する意思といったものは感じられない。「バックパッカーで『日本人宿』のようなものを作るのは日本人くらい。現地とのコミュニケーションを避けて楽なほうに流れている面もある」という指摘にみられるように、日本での「変わらない自分」は、日本を飛び出した海外でも「変わらない自分」であろうとしている。日本を飛び出すと同時に、「変わらない自分」からも飛び出す意思を芽生えさせなければ、「成熟社会のつまらなさ」にどこまでも付きまとわれることになるだろう。

《人間関係や仕事に疲れて、あるいはやりたいことが見つからないまま海外を目指す。いい「外こもり」は自分を見つめ直すきっかけになるが、下手をすると本当にただの引きこもりにもなってしまう。

タケシさんは今、病院で働いている。初めて就いた定職だ。

「結婚を考えているんですよ」

2年前に、旅先で知り合った20代の女性と3カ月間、旅をした。その人と結婚するために、今は資格の勉強に励む。

「旅から帰ってきてその報告を実家にしたら、父親がめったに買ってこないナポレオンを買ってきて『一杯やれや』と。勘当がとけたんですね」

レポートは日本にいればひきこもりやニートにもなっていたかもしれないが、バンコクの「日本人のたまり場で一日中、麻雀や読書をしてダラダラ暮らしてい」たタケシさん(40)が、旅で知り合った女性との結婚生活へと踏み出そうとする「希望」を紙面に残して、締め括る。もちろん、結婚生活など「希望」でもなんでもない、と旧世代には映るだろう。しかし、成熟社会に至って「希望」というものがどんどん切り下げられてきた新世代にとっては、かつては当たり前だった「就職」や「結婚」すらが「希望」に思えるほどの高みに上がってしまった。若者にとって「就職」や「結婚」に手を届かせること自体が、大変な苦労と力量をしいられる階段になったのだ。だがそこで隠されていた本当の問題は、自分の「声にならない声」がどんどん押し殺され、外に伝えられなくなっていく不安であり、絶望感であったにちがいない。そんな彼らにとって「就職」や「結婚」が単なる社会的な制度や通過儀礼ではもはやなく、自分の「声にならない声」が少しでも届く関係として命綱のように捉えられていたかもしなかった。

レポートの中の「タケシさん」は、自分の「声にならない声」が届く相手を40年の生涯にわたって初めて見出したようにみえる、ということが「希望」の真の意味であっ

て、40代の結婚生活によってようやく日本の世間の仲間入りができるようになるという希望の意味ではけっしてなかった。もちろん「タケシさん」は、結婚生活を通じて否応なしに世間への仲間入りを加速されていくだろう。そのなかで彼が大学の同窓会に行った時に、「課長になった」とか「子どもを受験させる」といった話に黙ったままだったそのときの自分を忘れて、同じようになってしまうのか、それともそのような周囲の輪から離れて、自分の「声にならない声」を押し広げながら歩いて行こうとするのかは、20年間の海外での放浪生活が彼自身にとってなんであったのか、を自問しつづける姿勢によって決定されるにちがいない。これまでの孤独な一人旅が、「結婚」によって二人旅になったただけなのだから。

斎藤環は長山靖生との対談（『諸君！』04・6）のなかで、今の若者が「自分探し系」と「ひきこもり系」に二分化している事態について、こう述べている。

ひきこもりの若者には違和感はなかったが、「一方、『自分探し系』には違和感があります。『若者のすべて』（PHP）の取材で渋谷の高校生たちに会った時、これはエイリアンだと思いました。当時チーマーやコギャルと言われた若者に強い他者性を感じたのです。彼らはひきこもれません。常にコミュニケーションで自我を維持するので、仲間がいない場所では自分を見失ってしまうのです。

4年前に発覚した新潟の少女監禁事件のように、ニュースネタにされやすい突発的な、理由なき犯罪は『ひきこもり系』、原宿系にやや多い。一方、オヤジ狩りのように仲間とつるんで悪さをする非行は、私が違和感を持った渋谷系、言ってみれば「自分探し系」が起きます。私自身一人で過ごすのは平気なほうだし、むしろ人というのが煩わしいくらいだから、仲間とばかりいてひきこもれない若者の増加に驚いています。昔も少しはいたのですが、携帯電話が『自分探し系』の増加を加速しました。携帯に何百人も登録しているから儀礼的な名刺交換と思っていたら、実は名前と顔が全員一致するのです。友達の数が、僕の頃より一桁上がっています。

今の若者をまとめる時に、キレやすくてコミュニケーションが下手で、ひきこもって、無気力で、と一括りに並べてはマズい。二軸があって、一方は自分探し系と呼ばれるコミュニケーション・スキルが低いひきこもり系の若者たちは、あんがい我慢強くて衝動性は低い。」

「自分探し系」が《仲間とばかりいてひきこもれない若者》傾向であるなら、「ひきこもり系」は自分の中にひきこもって仲間を見出せない若者傾向といえよう。前者は《仲間がいない場所では自分を見失ってしまう》点で、「自分不在」のなかに仲間を喚び込んでいるが、「ひきこもり系」もまた、自分には充たされておらず、「自分不在」のなかにひきこもっているようにみえる。つまり、「自分不在」が外に向かったとき、「自分探し系」になり、内に向かったとき、「ひきこもり系」になるのではないだろうか。コミュニケーション・スキルは前者が高く、後者が低いと必ずしもいえないのは、前者では

雑談能力の高さが、「声にならない声」を双方が探し当てていくという本来のコミュニケーション能力を逆に封じ込めているからだ。お喋りはコミュニケーションではないが、「ひきこもり系」はお喋りも奪われている状態なのである。

いうまでもなく若者の成熟拒否は、「親の生き方」からやってくる。会社人間の父親からも、専業主婦の母親からも、大人になることは素敵であるといったイメージが全く伝わってこないどころか、こんな大人たちにはなりたくないという否定的なイメージしか伝わってこないのである。もしそうであるなら、「親の生き方」を反面教師として自分はこんな大人たちになってみようという、全く別のイメージをつくりあげながら成熟していてもいい筈だ。ところが、今の若者にはそれがないのである。だから、成熟拒否ばかりで別の成熟のあり方を模索するという柔軟な態度が欠如しているのだ。変わらない親を拒否する自分もまた、一向に「変わらない」ことの矛盾から抜け出せずにいる若者たちの世界について、先の対談で斎藤環は次のように指摘する。

『ほしのこえ』をはじめ、約十年前に話題を呼んだアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（庵野秀明監督）が典型例です。（中略）閉じた内面世界と、本来別個であるはずの壮大な世界設定が、フィクショナルなシンクロ（一致）をする話のことです。壮大な世界設計に同一化して、それが自分の内面でもあり、同時に世界でもあるというストーリーが最近アニメやライトノベルでちょっとした流行みたいになっている。

評論家の東浩紀さんがラカンの精神分析用語を使って言うには、『想像界』と『現実界』があって、途中をつなぐ『象徴界』つまり中間項がないということです。本来、『自分』と『世界』の間には、家族→地域→国……という段階的な同心円を描いて世界観が構成されるはずですが、ところが若者にとっては、『内面』といきなり『全世界』しかなく、中間に対する想像力が欠けています。

その中では自分も世界も変わらない。アニメと同様、お話が進んで、登場人物間の関係などはいろいろ変わっても、初期設定自体は変わらないんです。そういう閉塞した、不動の世界観・自分観がある。」

この指摘は、若者はなぜ変わらなくなったのか、あるいは、変われなくなってしまったのかについて、彼らの「不動の世界観・自分観」の現実性のなさを鋭く突いている。いいかえると、中間項を欠いたまま、自分の内面がいきなり世界に重ねられてしまうという、非現実的な省略が施されているのだ。つまり自分は世界だと考えているに等しいから、自分が家族に衝突し、学校でも衝突し、職場で衝突することを通じて、変わらざるをえなくなる体験が積み重ねられ、その体験のなかから世界という構造をそれぞれに探し当てていくという道筋は消えてしまっているのである。自分の内面というものが現実には晒されることがありえなくなっているのです。そこで起こってくるのは「欲望」の低下であり、斎藤環はこう憂慮する。「ひきこもりだけの問題でなく、若者全体に、野心や欲がなくなっています。意欲とかキレイ事を言っても、所詮は欲望です。欲望自体が

低下したところに意欲も出てきようがない。欲がなくなっていく若者をどうすればいいか。大人として立派な家、いい車に欲望を持つ若者がいなくなりました。自分の理想とする生活へのリアリティが描けなくなってしまった。あるいはすでに豊かな生活を送っているので、自立すると水準を落とすしかないという恐怖感があるのかもしれない。」

自分と世界との間にある筈の、現実的な行程ないし回路が全く省略されてしまっているという、若者のありかたが彼らの「途上感」にもよく出ていることを、斎藤環は対談で示している。

「『好きなことを見つけて仕事にした自分』という理想を設定して、今はそこへの途上だと自己愛的に肯定している。評論家の竹熊健太郎さんの指摘が興味深いのですが、上久一色村のオウムのサティアンはなぜバラックでもよかったのかということ、いずれできる神殿の途上なのだと信者が納得しているからだということです。同様に、おたくもいずれ整理整頓された部屋を想像しているから、今はビデオやカップラーメンだらけの豚小屋のような部屋にひきこもっているということです。途上感は本来リアルな目標と対でなければならないのに、目標が実現性に乏しくて、漠然としている。『いずれ何とかなるさ』といっても、それが楽観とは限らないキツさがあります。フリーター仲間同士の承認により、フリーターで構わない、あるがままの自分でOKという自己愛が生じる懸念があります。しかし生涯フリーターという覚悟を決めている人はいないから、いずれ何者かになるという漠然とした途上感で支えて、目標自体のリアルな設定が抜けてしまうことは問題です。」

「本当の自分」という発想についても、同じことがいえる。いずれ「本当の自分」になる筈だから、いまの本当でない自分にも耐えられるし、やっていけるという理屈である。

「目標が実現性に乏しくて、漠然としている」だけでなく、そこに向かいつつある自分というリアリティーのなさも、当然付け加えられなくてはならない。若者の発想そのものにおいてすべての面でひきこもり状態にあるのが感じられるが、そのひきこもり状態のなかでは《就労の失敗は、まるで自分の全人格が否定されたに等しいトラウマ的体験になる》(斎藤環『中央公論』04・10)ように、異性からのちょっとした反応すらもそうになってしまう。彼らのひきこもり状態のなかに他者は存在しないから、たとえば、若者たちに評判のいい香山リカの『就職がこわい』にしても、「就労を動機づけてくれる本」として読まれずに、「就労できない自分の問題を鋭く指摘してくれる本」として読まれてしまうところに、《問題の根深さの一端が覗いている》と、斎藤環は前記の文章で指摘して、こう続ける。《学者や評論家や精神科医が試みる分析は、確かに当たっているのだろう。問題は、どれほど分析が正当であっても、若者はその分析をただ受け入れるだけで、就労へと動機づけられることはない。この点こそが、ニートに代表される若者への就労対策において、最大の問題なのだ。》

2005年7月3日記

